

正史  
実傳

いはは文庫

十二

~13

4307

12

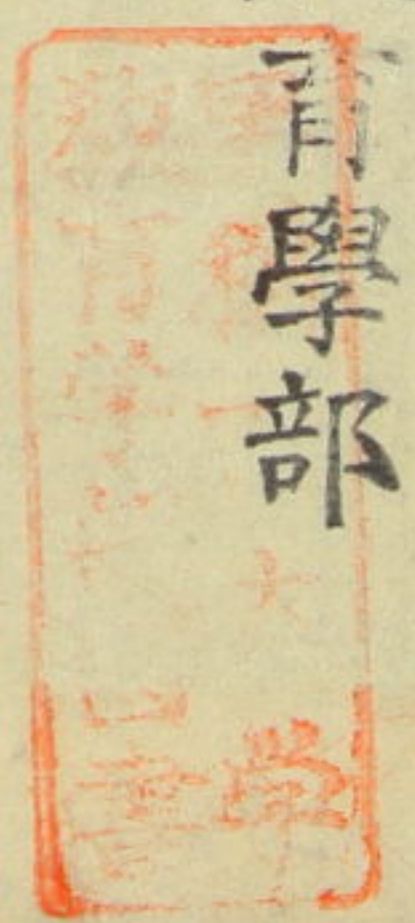


13  
4307  
12

2  
250  
12



早稲田大學教育學部



<2000-348>  
16100

いろは文庫十二編叙

所謂四十七士は、大星成高、あふらむ、  
かの寺岡ふくろ、中、花死と、虎と、龍言と  
龍も、おのころ、わはしに甲乙、おろ、いづれも  
其の英、あま、おれ、も、その中、上、幸、幸、ゆり、  
龍、及、僧、俗、の、語、龍、も、著、る、義、名、と、知、ら  
ま、あ、り、又、お、れ、お、れ、お、れ、の、傳、は、さ、ら、ら、

名をよぶよるも知らぬものなり  
 志名別我  
 今らんまゝの書もあつた  
 先死成道ありては  
 志ん子遺徳に絶する妻もれが一個の  
 傳成考一猶その妻子一族等より人とな  
 世きび強んかと思ふ老はあふまらぬ  
 經より才に長物終其の一日は編教の

今更り止む為事ある終むるも又  
 弟十二編の傳成先と

去捨の雪解る解る  
 南庭の梅もどめう寂る日

為水春百あり紀書







一五  
芳哉

人足の

物

降り

かえと

深魚

うら



正史  
実傳

いろは文庫卷之三十四

江戸

為永春水著

第六十七回

一 うれしく、婆アどんか冬が大せうらあさまで、居る  
きりまごころ、祝して、さうし、あ、ア、マ、あ、ア、エ、は、寝、と  
あ、で、ゆ、り、て、居、る、の、り、ウ、コ、レ、サ、か、冬、大、何、を、と、ん、あ、ふ  
ノ、あ、さ、ま、る、の、ヨ、目、を、あ、り、て、森、返、り、を、あ、あ、大、う、と、狗  
ノ、あ、で、ゆ、り、て、居、る、の、と、大、ア、あ、の、り、コ、レ、サ、く、ト、中、り、記、さ、れ



おもひ目を差して起せり「イヤあいのちをり住居で  
 こころあまきを子にア、怖うらト喘息をホット吐くアサ  
 幸味のつもの否お度をき入懐さうり何ぞ怖い後でも  
 へんあへの「ハイ寔小否アお度をきんこのでございませうが子  
 まうり甘愛で宜うございませうさうさ由実正おあふ  
 度うあへのあう何根さうりとあふとさうさふ狗り  
 トツキリ 為まをト 魁尾のあうを手にあさ「あうり教て  
 あうめりん」「さうさあうりんおあふとさうさあふ  
 いたす上」

イロハナシ上

度があるのりとしてまアお愛をきこので「アウ所  
 何処さう分りませんが子何でゆ五並おあふ愛を  
 ぎのまこのあさ軍としてゆのの知りませんけしと  
 否か度教へ大勢であうけて控って切合らうりまり  
 まいせと子その中お肉のを助が交つて居まうり自  
 かり何処の控らうさうりて魚さうけおあので居  
 あうり人さ一ゆてさうらいて居まをうらア、あふあいのふ  
 教さるさうらふさうりは三と後の方へトつてお出さうり



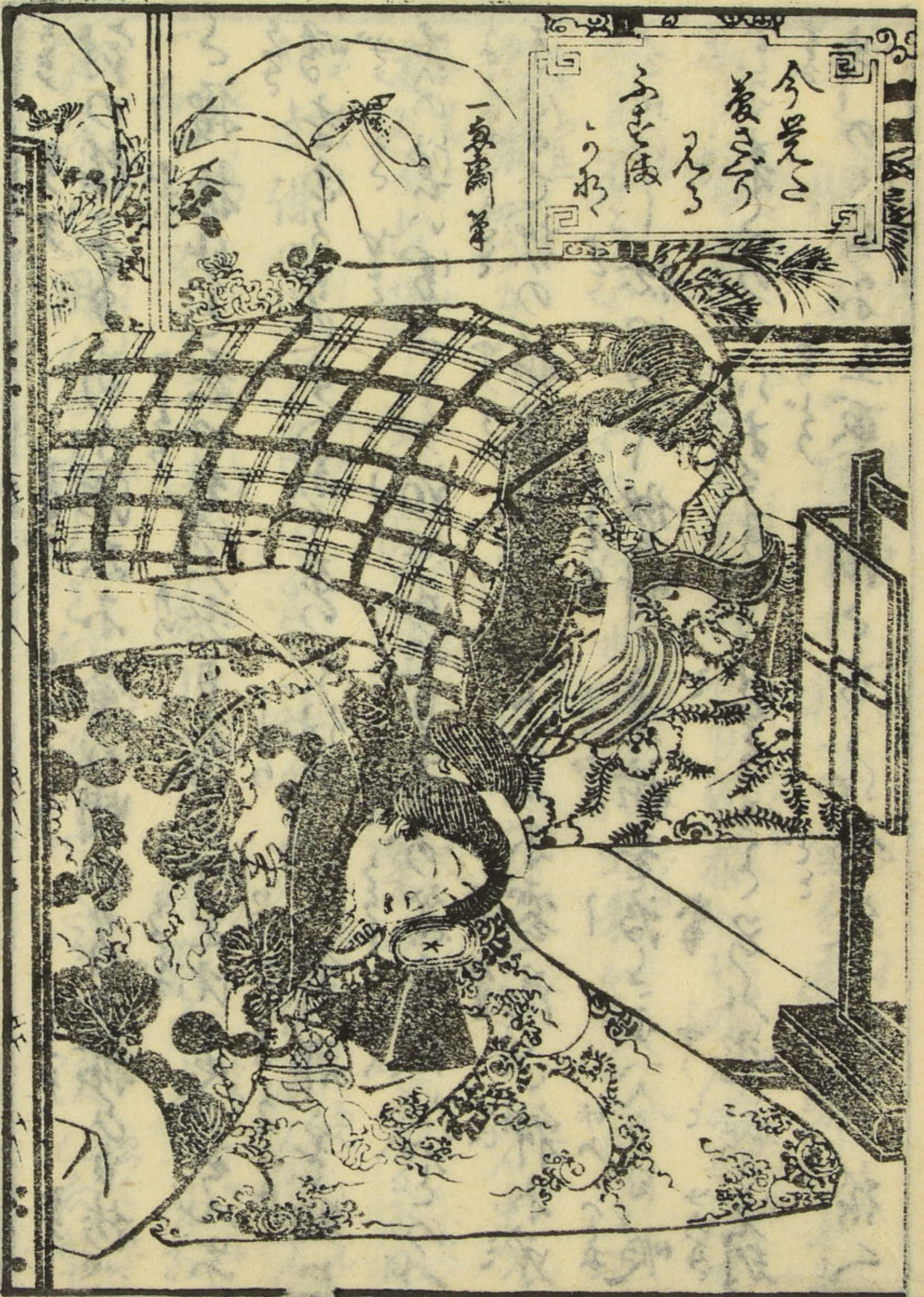
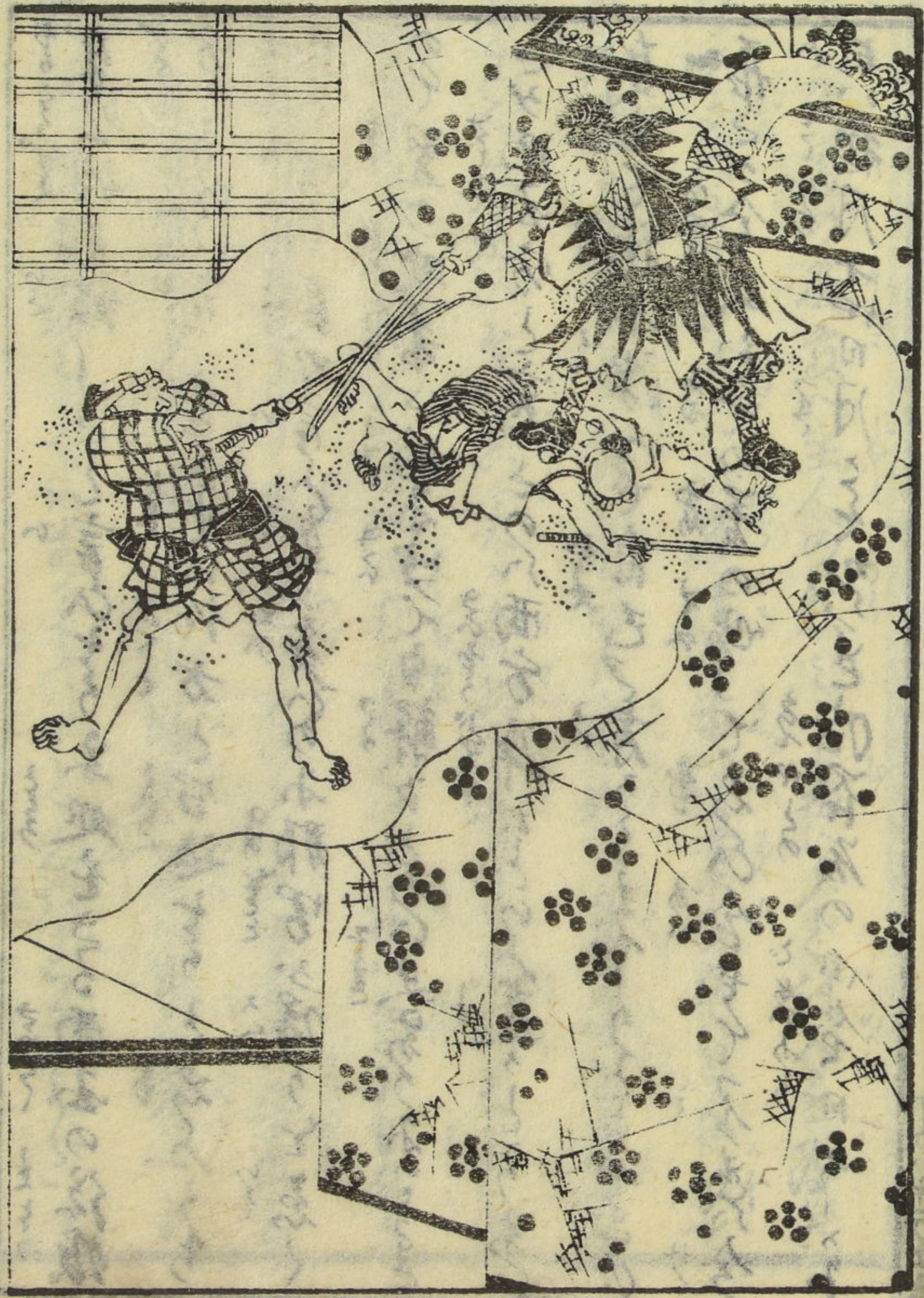
髪を掛かりと云つても咽がへまつて物が言へませす  
気が揉てありませんち小何なる法と云ふ家の向う  
出て来ると速小又切合をいめる指でございませう  
危ううのて見や飛らまませむ窓のり小例へ性  
加勢を為すうと云つても體がまうんと云うて初  
由未ませんちう氣を揉ねつて飛る処をお母さん  
小何とて漸く氣が付て目々さうこのてこゝのま  
一ツマアとんご髪を引さりのさうまて由切らま

髪を引ると體へ金ケオのさう大それた宮へ  
窓助が切らまて血をけ小あつて処を引この小  
が主取を引て見くら版く小金ケオのさう小初ら  
ごらうら宮へ小ア云う一然うご宮へございませ  
けまご由何ごさ氣小かつてありませんヨト小肉た肉  
ハキを細せつくと云て飛ハテナ何指由氣に  
ある度と云ふ「アヤオ公何ガ氣小ありませ」  
ハキハキ由先刻々言出せううと云ふとけ

ともおれ 達小余本亦苦方をさせらるゆゆあいと  
 獨りて狗を痛めて飛ぶが先刻 助が降る時の  
 教をいふさう「い何じろ 氣が射す」あんどを愛する  
 てもいさかきさう「然らサ 那雷が今夜主をどわて  
 聖ハ主人小同見をまると言ふのあらん 橋一ろい浮  
 らきとて出て往く 管ごの小帳をさして別まる時  
 ホロと涙をらり「あざう急いであのちを向と教う何  
 う ぞえ」 由 是由年夢の  
 振由合息が往うあいとあつこく「ゲイヤ」 是由年夢の

僻目うとろひ持て史ある小今 秋森床へ運入 処  
 々頻り小狗さしむるの小窓の戸へさうく 雲がう  
 かる 畜が耳小障つて空とも寐さすあいうろし 出  
 きてはぐと 多助の指子を考へて入るの小ける  
 途中で急つと時中 零令為 果て飛ぶ老があん平泳  
 切小世話をして呉る老があると言つて 然らうは五日の肉  
 小主取ら出来て身のままうまで 立派小あうまるの  
 てもあるまへが 義史 秘小世話をまると人があるゆゆの







言はまて二個の物にせし中におもおをい涙をこゝお  
新さん史が第一実正あり私史の根跡もせし  
一テリ表の史が実正の史をいひ身は百石に抱へられ  
このうり娘は「井」を公もまたとんと史をよ作れ  
ごごいませんろ若菜正で口説しませぬ助が生場  
切殺さるる又殺さるるあい処クせん未史を為出  
さう只で海むまくりごごいませぬ小婿の命をか  
りまが娘いふふまごごいませぬあいつごごいませ

イロハニラ上生

せんか「子麻を言」いぬ右左二君不事へ負女  
あま不まきまきといふとわ女中本が好くうう漢をわ  
つて飛さるゝあつごごいませぬ那方百石で外の大石へ抱へ  
らまるといふのいひ身中本をわいふあいつあつて並の  
故であいつうごごいませぬいふとわ女中本が好くうう漢をわ  
まの娘ううとく又まきまきいふとわ女中本が好くうう漢をわ  
物でもあいつううとく又まきまきいふとわ女中本が好くうう漢をわ  
主取まて百石不ても在付とのい結構未史ごごいませぬ

飛越が第一い身の考へきう敵の屋敷へ付入を為さ  
 ので見ろき処で付死を為すと申又ハ本を逐つて  
 切腹を為すと申永世武士の體と言ハまうのさう  
 びらんの度ハありぬア為さぬホニ忘まて飛越が考へ主  
 小先刻多助が何さ死けて仕つて申アあいつハい  
 さま振紗色を「ううい身の考へきうと申つてまを  
 一寸持つて来て見せ申言つてお尋ハ身を起し  
 用筆筒の引出し不入て壺一小包を取出し来り

何ッ大さの赤いのが運入つて飛越が「結」ぬ  
 紙袋で封が着てござおますと「ト」見せおせぬ  
 不取れ「ある程」金で申運入て飛越が「大さう  
 重の包」言入あうが「考へ」し「解つ」て  
 彼令大切お物「運入」つて「居る」小申為う現  
 在の女房不致け「初」の小封を「まる」小日及が申へ  
 封を「結」んだの「い」さう「小助」て「見せ」お申不考  
 の「さう」考へ「し」て「入る」と「い」さう「小助」の

あり度とあるはさるるついでに「無いて」云々云々振子ガ初まる  
 ざつと一件の振沙包を解小なる也  
 公假令聲の故さるる云々封トの爲てある也と  
 云々云々然るで云々の筋云々云々云々云々  
 の云々云々云々云々「ハテ官云々」云々云々  
 云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々  
 云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々  
 構ひ小日ある度云々云々云々云々云々云々云々  
 云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々

イロハ三十一

言ひ封を切つて包云々振沙を云々云々  
 二封の書状ありと云々と書小萩左内振中村  
 多助と徳めある不細とと左内を云々云々女房  
 由か冬由儀小むらうくのと云々云々振子の振  
 ぎいば安きんハあうりけと

第六十八回

「フッ」史云々公の処々書送云々云々紙を  
 云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々



きりおきのふいざんおごろうとあんと寛小気が痛  
んでありおせんこうと言あやう手燭小灯をとりせ左  
肉は其おきの引出より眼鏡をとりてかけらるもよ  
ぐりげお手紙を管を漬下まを文章書か  
一筆中と残しあつまふ今日御教の御文心中  
の秘更らち胸中とごうく依不西玉方の秘傳へ  
存公伝のういり中つらういどゆ突の今晩  
同盟の老どもや合せ必死の覚悟はむも他

不共上十

安をお保りいと也妻細少の中とまひとの底  
急場い推察お下さるべき秋只めと物不思  
まいらつて只策最妙の場おをのこおあざいお  
柄多学お徳めまうし海老目比の心懸情と  
由報下がうく今を山名残とお成中いけ金おい  
おあがらもまごい用えおとてお徳くおいどゆ  
おあお此おといして入用由山名あくのる拙者  
亡びあて冬が文の左附の助もおあ下

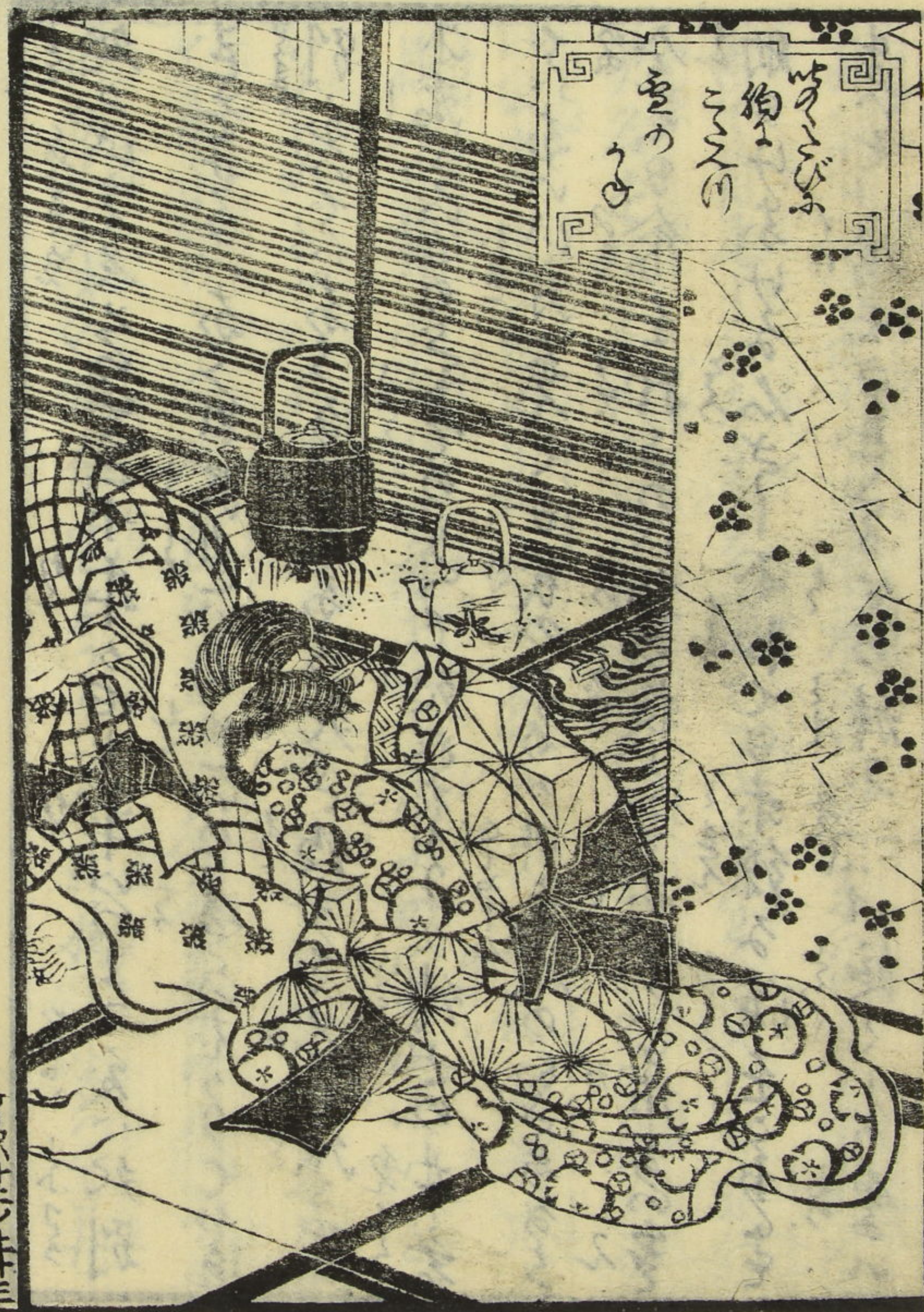
と新と何いひ書状死後小口一焼を下い  
ひきつり取見ともおむら下づくいみと

ト養護、少いおささきども赤んころ廻おあつひきしてし  
由長と小あつおどお冬いもとうりお種さくおあつを  
ワット返出せむ肉由焼くぬ老の涙をよ来るは天口  
え左「おめろく」と涙をるおえお月出さういさひあ  
ど「まごて見ぐ返るあで居るまをまめめりを助  
はえ惜のうてもごさあませらうが私しおアおろこのん

わ根が可憐おでありません只い立派おは作けまど中  
あつとあつお在あつらとアごさあません左「アる廉ア  
いお身の焼く涙ぐらよまるのどおを由返あ三おけ  
う年の初あつり等ごい地悪いことおどくごらう史をを  
りお身いあつが能くい身のいところを考へて見ら現在  
主人の款を安穩おしてをあがら付おせごを生涯後  
式と人小返り扱をさきして由雲の命を大るお  
と連添して居るのが旨ひう又先刻由言ッてあつい

勢いあつく並この度で討ちのどろあいのをい辛万苦  
あて首尾よく本意を遂て見せしむるに史こそ未代と  
其名を殊も大なる然るの男を良史小指こそ此  
い公家言の家の方小まといより申仕合史を  
撰んで聲不流とい身までが武士の梁加小計ごと  
いりのどがかぬいぬのちり腰抜せ申す輝小入の  
て居るいのうより良史を撰後小まるとのを本意を  
小由ふしむい能令生あうへて史輝小あつて居る

怨ぐは先長らつて二十年う四十年いづも一々に死別  
をせむいあうぬ只悲いと世いの遠みまうてあは  
別あひてあうあい夏あう死ど初まで名の残るや  
不為といのどあそのらうで死ねをうり侍士の本意  
かあいひ射あんど申長のとめり四主人のおくあう  
今その命を捨るのいおの殺とも思つて居るあは  
助のけあげるんざう不恥て申未練る涙をこぼさ  
まいそト辱まさせくる父の祥小一い悔くとい辱み



お辨有難入らざらばまをまきうくははばしきせんが  
 然うのふま史のノ若あう何れらち昭て一言で由ら  
 てせせて異き一もんとらう松の中未考どうんといふ  
 虫義のこゆに死小使くとまうまのをを死小止也  
 まままの海ふをたるとんててせめて別のをせゆら  
 交一ませうりの不聖の暇はあふあんどまざく欺  
 きて使してのく史が本末もみまきトのひゆけて又  
 伏まらばハニサ史の異を初とのふのこも程の一大事と

二四十三十四

りのを死小史程の中せゆにわって美一そのゆげ世  
 先日  
 名へ世まとい大後どうら本をを譲るまでい変ては外を  
 史のこ言ふ史のををてたて史小遠のい史のりを  
 仮條小由せんあをのををせとあるりのうまづ一由後  
 史でん後のかいゆうふといは書きををかぬ一の身の左側  
 ををて食ちを添て残して使つこの余程為ふさゆ  
 せあろうの小形屋いこのを助の仕方條不甘ふあ書と  
 史のものを假小由根ら一の史をきつて海あのと云

あぢうの色を見まうし、あぢう 左 角のうらうら夜が明く  
 大々この夜のうち小本を遷すであらうう教書して  
 佐つて申んといやうどが流るゝとるむもあらうまゝの  
 空うはと為らう世名の評判でも根子がかまらうど  
 らうまア何あり市助あぢう を託して版でも持たせ  
 るが官ひりあ ホニ 忘しきと居まらうが市助の昨日の文  
 方も申居候へたお神の夜のお身為を指とせて  
 つとまらうが申切つとまらう帰りますせん

あぢう 市助の昨日の文

あぢう 市助の昨日の文

困つとりのうらうら夜が明く  
 運入つて降るまを忘しきと居まらうが市助の昨日の文  
 いらぬが酒を呑むとまらうのまのそまらう同をかせ  
 たらあいのト降るまらうの文をドンと叩きまらう 申  
 文をかめあまつて下さいまらう大受お強勃が出来は  
申 たらあいのト降るまらうの文をドンと叩きまらう 申  
 たらあいのト降るまらうの文をドンと叩きまらう 申  
 たらあいのト降るまらうの文をドンと叩きまらう 申  
 たらあいのト降るまらうの文をドンと叩きまらう 申  
 たらあいのト降るまらうの文をドンと叩きまらう 申

くおまをあはしめし一ト眼のまを替てりふわぞ（左）「コレは身（右）  
いほこの周章をい居あいがを若何をあいつるまこのごう（ま）  
沈足日洗のあいでさう一このあさ（市）「十二沈足ごう人を厭て  
居るまはまはまのり向の板襖の洗のま一首をさうて  
を人殺が五十八人まうりト半かづくよりた肉はさのつと  
あふあを「コレ市助をあのやう小まてい何のまごう訳が解ら  
あいつ何の周章をいあいつら氣をあ付てこのふりと咄で  
せうご定ひたまはして謝るまをまのり「あつ襖がらまうりまは

お解まをいまい実の昨日の夕方おはねのあ女高を持て  
お申居敷へ住す「さうお屋小居るま若く雪が溶出してを  
いおあふと一をさのて住あつとまはま「あが喰付てさうく  
を歎へ櫻が抜け解れまて仕とましくあのと目くまえて見  
ると疾うめて居まをさうら南をとまへまのつ「こまてまはま  
あいつ帰りのると途中小大物人達が居て居る款付てく  
とて小登ざりまをさう何の款付てらうと居る人のふ  
のをまくと居るおの浪人うまの屋敷へ討て款の首

を<sup>し</sup>取<sup>り</sup>て今<sup>い</sup>ひ<sup>た</sup>り引<sup>ひ</sup>どげ<sup>て</sup>来<sup>く</sup>るといふ強<sup>い</sup>き<sup>う</sup>を<sup>す</sup>く<sup>り</sup>能<sup>く</sup>合<sup>ひ</sup>を<sup>し</sup>  
く<sup>る</sup>あ<sup>ら</sup>て<sup>ま</sup>し<sup>る</sup>お<sup>し</sup>と<sup>ら</sup>ま<sup>ら</sup>る<sup>ま</sup>の<sup>み</sup>を<sup>ん</sup>を<sup>ん</sup>い<sup>は</sup>れ<sup>し</sup>け<sup>し</sup>け<sup>し</sup>と  
人<sup>の</sup>中<sup>へ</sup>送<sup>り</sup>入<sup>り</sup>て<sup>は</sup>結<sup>は</sup>て<sup>居</sup>る<sup>に</sup>傾<sup>け</sup>て<sup>は</sup>違<sup>は</sup>ら<sup>ぬ</sup>向<sup>ひ</sup>と<sup>来</sup>は<sup>じ</sup>ま<sup>す</sup>  
と<sup>ら</sup>子<sup>ご</sup>ら<sup>う</sup>の<sup>威</sup>勢<sup>の</sup>定<sup>ま</sup>り<sup>し</sup>と<sup>ら</sup>の<sup>一</sup>を<sup>小</sup>教<sup>を</sup>有<sup>り</sup>お  
引<sup>ひ</sup>く<sup>り</sup>の<sup>取</sup>ぐ<sup>き</sup>来<sup>ると</sup>史<sup>を</sup>一<sup>に</sup>履<sup>く</sup>形<sup>を</sup>立<sup>て</sup>来<sup>る</sup>の<sup>う</sup>勢<sup>中</sup>  
色<sup>ど</sup>う<sup>け</sup>お<sup>ま</sup>の<sup>て</sup>居<sup>る</sup>の<sup>ゆ</sup>えに<sup>は</sup>板<sup>の</sup>端<sup>を</sup>か<sup>つ</sup>て  
の<sup>ゆ</sup>えに<sup>は</sup>強<sup>勢</sup>で<sup>は</sup>い<sup>ま</sup>し<sup>う</sup>と<sup>ら</sup>の<sup>中</sup>に<sup>は</sup>百<sup>を</sup>え<sup>ん</sup>が<sup>交</sup>  
て<sup>居</sup>る<sup>に</sup>折<sup>を</sup>洗<sup>へ</sup>は<sup>し</sup>と<sup>ら</sup>の<sup>百</sup>を<sup>え</sup>ん<sup>は</sup>一<sup>に</sup>昨日<sup>日</sup>未<sup>だ</sup>

四十七

と<sup>大</sup>弟<sup>を</sup>某<sup>の</sup>の<sup>足</sup>指<sup>の</sup>更<sup>で</sup>い<sup>ま</sup>し<sup>ま</sup>す<sup>に</sup>一<sup>に</sup>史<sup>と</sup>や<sup>り</sup>助<sup>け</sup>  
が<sup>あ</sup>り<sup>し</sup>と<sup>の</sup>仲<sup>も</sup>お<sup>し</sup>と<sup>ら</sup>の<sup>で</sup>お<sup>ま</sup>の<sup>市</sup>に<sup>サ</sup>ト<sup>取</sup>お<sup>あ</sup>ん  
ま<sup>ら</sup>り<sup>の</sup>者<sup>と</sup>を<sup>ら</sup>い<sup>し</sup>て<sup>は</sup>お<sup>し</sup>と<sup>ら</sup>の<sup>を</sup>て<sup>は</sup>い<sup>し</sup>て<sup>は</sup>雪<sup>を</sup>  
掘<sup>ん</sup>で<sup>は</sup>冷<sup>み</sup>ひ<sup>あ</sup>ぐ<sup>り</sup>を<sup>を</sup>限<sup>り</sup>て<sup>は</sup>お<sup>し</sup>と<sup>ら</sup>の<sup>に</sup>て<sup>は</sup>来<sup>り</sup>し<sup>と</sup>  
ひ<sup>を</sup>ら<sup>し</sup>く<sup>い</sup>は<sup>し</sup>と<sup>ら</sup>の<sup>に</sup>て<sup>は</sup>お<sup>し</sup>と<sup>ら</sup>の<sup>に</sup>て<sup>は</sup>須<sup>史</sup>神<sup>を</sup>  
由<sup>ま</sup>り<sup>け</sup>る<sup>に</sup>

正史  
實傳  
いろは文庫卷之三十四



江戸の文庫巻之三十五

Handwritten text in a cursive style, likely a transcription of the printed text on the left page.

江戸の文庫巻之三十五

江戸の文庫巻之三十五

江戸

為永春水著

第六十九回

左内ち若やとありいへ今市助の吐くを吹てきんを  
いよく助那が首尾よくなると遠くうらと強くなり  
婿一さの花立やうふ思ふあぞ 市助那男の中村を助  
とてつてけの舞ふが地谷家の大女んとてうた  
付うとのみ計畧八百を零落と振りを

為さげのほどゆありのく 実のふも葉菜小葉を賣やうる  
 去てのあいのうけ後の八百屋どの大葉も葉とれと  
 いまふでいあにぞ才一人岐が定あいのう 市  
 那且那の本名が中村を由て八百屋どのあのが世を  
 為す彼の名り子 何ぞ芝居あても 何うそうで強勢を  
 どのあまうて子下 奴の一体をんむむとさう速く知  
 つさうあの且那のお供をして一か款付ふ物のごあて  
 惜い夏を為やいと 左 可やをんむむどの言ふあひ及た

市  
 市  
 市

あいそ夏で衣取と一寸は掛とをりう又いそあ顔で  
 何らて居て向ふうおで由言ひうけとあう 市  
 さの付と枯子のどのあもせん下奴の夢でむけして  
 見えやうと必ひまうか 技師の種あんを提て大  
 勢で来るのでどきあまをさうう 弟一おで由言ソうら  
 どんる目あ合りあの中知まびまよりゆけとさ速く  
 かあうせまうす方が宜ううとあざあのて改つ  
 て来りやいと 市  
 市  
 市

大それた病で由緒を尋ねて居るやうな市川下奴も由緒の  
へやいあんさる魚さうけふあつて居るツツさう病のあり  
やせうの何と連の元と完おそ笑ひあがう咄くを  
為のく歩ゆつあやう指あが下奴の具負目のあ  
あのか他の元よる勢ひが定くつえやうさう十二  
の底中ありやましまのお爺さん何指紋しもうせうさ  
私しやア及まゆせゆ往つて余所あがうせゆさう一度  
重いさうさあまゆ左あはれ秘あうさうあのみ乃乃理を

50111011111

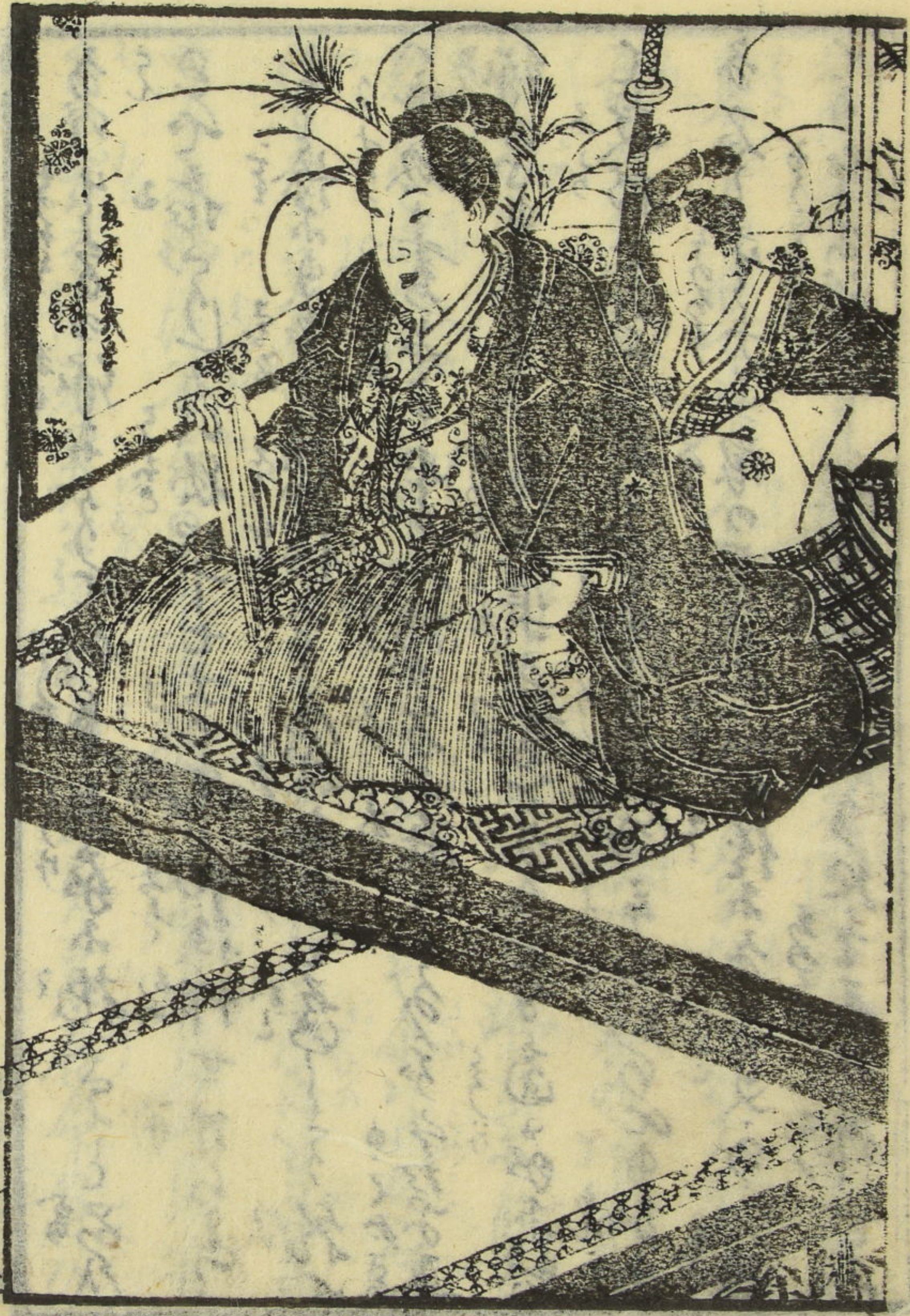
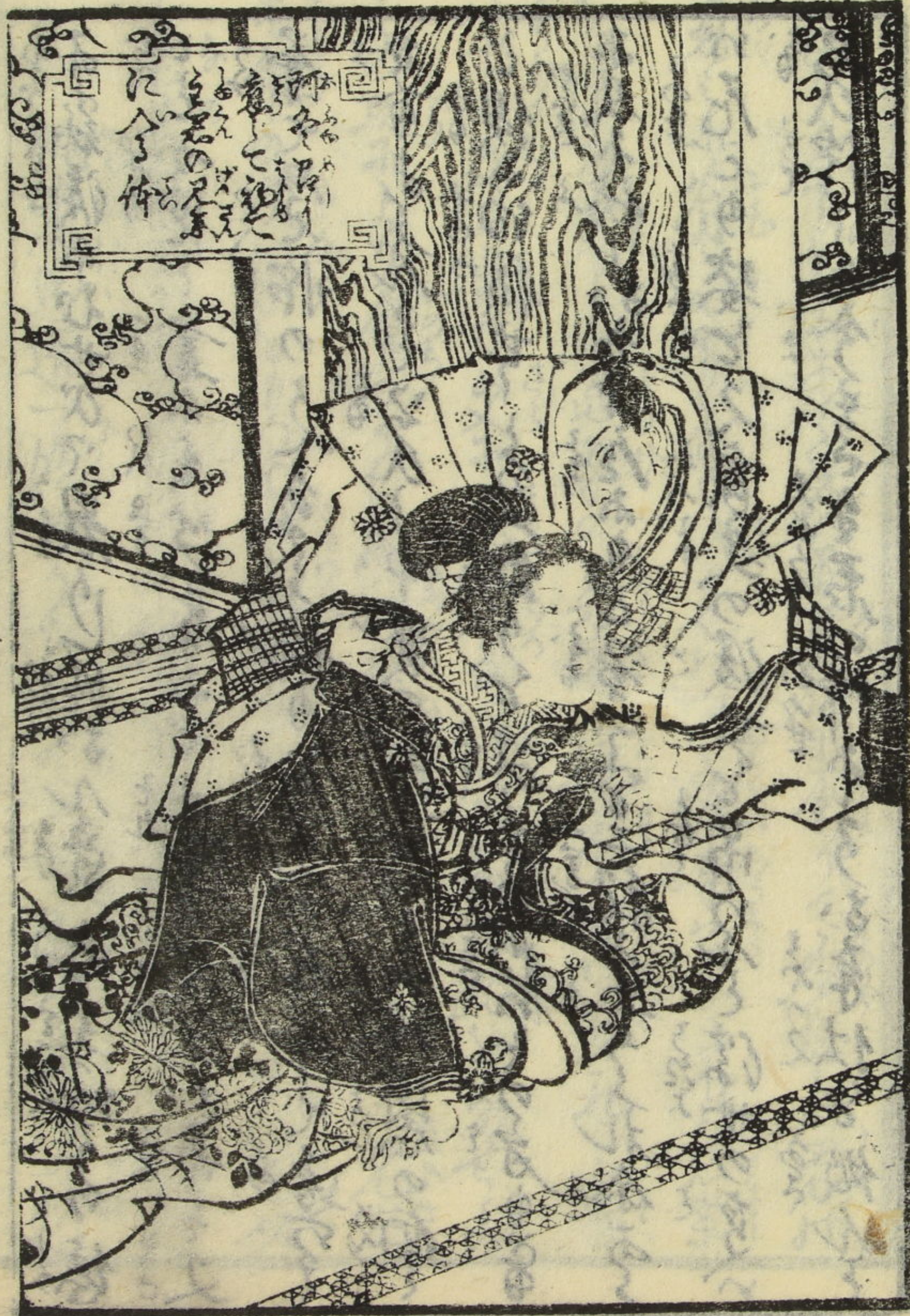
横ごさへりら女の目や涙を返つて往つと所がけ大  
ごりのを連中退付するあゆみり命令さう退付  
てあまらるの支障の類をえ合さうそ処の懸念に  
引さうさして金珠のやうふ疑かさうつて指さる物  
不学之の涙中とがまを中らま直があつてい朋の  
るあで良まお恥をあへる同お若く又涙中とがま  
かうさる物のるあまあうまぬの直と未練をぬごと  
まきげまんであうさのたお物に往つてい物の

おもあろうは<sup>その</sup>いよく名残が惜ま<sup>き</sup>り列<sup>り</sup>せられ  
るの<sup>ぶ</sup>であるまの<sup>ぶ</sup>実の<sup>ぶ</sup>い<sup>ぶ</sup>由<sup>ぶ</sup>近<sup>ぶ</sup>歩<sup>ぶ</sup>と<sup>ぶ</sup>性<sup>ぶ</sup>の<sup>ぶ</sup>一<sup>ぶ</sup>十<sup>ぶ</sup>月<sup>ぶ</sup>迄<sup>ぶ</sup>  
と<sup>ぶ</sup>う<sup>ぶ</sup>人<sup>ぶ</sup>で<sup>ぶ</sup>い<sup>ぶ</sup>お<sup>ぶ</sup>ね<sup>ぶ</sup>し<sup>ぶ</sup>の<sup>ぶ</sup>ん<sup>ぶ</sup>と<sup>ぶ</sup>由<sup>ぶ</sup>那<sup>ぶ</sup>男<sup>ぶ</sup>お<sup>ぶ</sup>か<sup>ぶ</sup>る<sup>ぶ</sup>せ<sup>ぶ</sup>て<sup>ぶ</sup>考<sup>ぶ</sup>う<sup>ぶ</sup>と<sup>ぶ</sup>の<sup>ぶ</sup>是<sup>ぶ</sup>  
き<sup>ぶ</sup>む<sup>ぶ</sup>が<sup>ぶ</sup>く<sup>ぶ</sup>て<sup>ぶ</sup>ほ<sup>ぶ</sup>ら<sup>ぶ</sup>あ<sup>ぶ</sup>の<sup>ぶ</sup>け<sup>ぶ</sup>ま<sup>ぶ</sup>と<sup>ぶ</sup>由<sup>ぶ</sup>ま<sup>ぶ</sup>の<sup>ぶ</sup>役<sup>ぶ</sup>月<sup>ぶ</sup>由<sup>ぶ</sup>い<sup>ぶ</sup>て<sup>ぶ</sup>居<sup>ぶ</sup>る<sup>ぶ</sup>  
い<sup>ぶ</sup>身<sup>ぶ</sup>と<sup>ぶ</sup>の<sup>ぶ</sup>お<sup>ぶ</sup>備<sup>ぶ</sup>履<sup>ぶ</sup>指<sup>ぶ</sup>の<sup>ぶ</sup>お<sup>ぶ</sup>名<sup>ぶ</sup>お<sup>ぶ</sup>由<sup>ぶ</sup>か<sup>ぶ</sup>り<sup>ぶ</sup>る<sup>ぶ</sup>衣<sup>ぶ</sup>が<sup>ぶ</sup>あ<sup>ぶ</sup>り<sup>ぶ</sup>て<sup>ぶ</sup>い<sup>ぶ</sup>淋<sup>ぶ</sup>  
あ<sup>ぶ</sup>の<sup>ぶ</sup>と<sup>ぶ</sup>い<sup>ぶ</sup>身<sup>ぶ</sup>を<sup>ぶ</sup>え<sup>ぶ</sup>ら<sup>ぶ</sup>う<sup>ぶ</sup>人<sup>ぶ</sup>を<sup>ぶ</sup>指<sup>ぶ</sup>る<sup>ぶ</sup>は<sup>ぶ</sup>い<sup>ぶ</sup>う<sup>ぶ</sup>の<sup>ぶ</sup>良<sup>ぶ</sup>衣<sup>ぶ</sup>の<sup>ぶ</sup>名<sup>ぶ</sup>あ<sup>ぶ</sup>て<sup>ぶ</sup>  
清<sup>ぶ</sup>く<sup>ぶ</sup>ま<sup>ぶ</sup>の<sup>ぶ</sup>と<sup>ぶ</sup>名<sup>ぶ</sup>掛<sup>ぶ</sup>て<sup>ぶ</sup>悲<sup>ぶ</sup>し<sup>ぶ</sup>の<sup>ぶ</sup>行<sup>ぶ</sup>を<sup>ぶ</sup>身<sup>ぶ</sup>抱<sup>ぶ</sup>せ<sup>ぶ</sup>び<sup>ぶ</sup>武<sup>ぶ</sup>士<sup>ぶ</sup>の<sup>ぶ</sup>妻<sup>ぶ</sup>  
と<sup>ぶ</sup>の<sup>ぶ</sup>言<sup>ぶ</sup>の<sup>ぶ</sup>ま<sup>ぶ</sup>ぬ<sup>ぶ</sup>と<sup>ぶ</sup>辞<sup>ぶ</sup>を<sup>ぶ</sup>ま<sup>ぶ</sup>り<sup>ぶ</sup>て<sup>ぶ</sup>論<sup>ぶ</sup>せ<sup>ぶ</sup>い<sup>ぶ</sup>な<sup>ぶ</sup>う<sup>ぶ</sup>く<sup>ぶ</sup>お<sup>ぶ</sup>け<sup>ぶ</sup>釋<sup>ぶ</sup>又<sup>ぶ</sup>

由<sup>ぶ</sup>身<sup>ぶ</sup>強<sup>ぶ</sup>ま<sup>ぶ</sup>生<sup>ぶ</sup>備<sup>ぶ</sup>と<sup>ぶ</sup>ま<sup>ぶ</sup>の<sup>ぶ</sup>衣<sup>ぶ</sup>角<sup>ぶ</sup>は<sup>ぶ</sup>う<sup>ぶ</sup>ち<sup>ぶ</sup>い<sup>ぶ</sup>備<sup>ぶ</sup>討<sup>ぶ</sup>  
の<sup>ぶ</sup>衣<sup>ぶ</sup>世<sup>ぶ</sup>間<sup>ぶ</sup>お<sup>ぶ</sup>使<sup>ぶ</sup>て<sup>ぶ</sup>大<sup>ぶ</sup>判<sup>ぶ</sup>判<sup>ぶ</sup>ある<sup>ぶ</sup>法<sup>ぶ</sup>お<sup>ぶ</sup>又<sup>ぶ</sup>か<sup>ぶ</sup>の<sup>ぶ</sup>下<sup>ぶ</sup>僕<sup>ぶ</sup>市<sup>ぶ</sup>  
ゆ<sup>ぶ</sup>の<sup>ぶ</sup>その<sup>ぶ</sup>身<sup>ぶ</sup>の<sup>ぶ</sup>指<sup>ぶ</sup>為<sup>ぶ</sup>忠<sup>ぶ</sup>あ<sup>ぶ</sup>の<sup>ぶ</sup>ま<sup>ぶ</sup>ど<sup>ぶ</sup>強<sup>ぶ</sup>い<sup>ぶ</sup>衣<sup>ぶ</sup>が<sup>ぶ</sup>好<sup>ぶ</sup>ま<sup>ぶ</sup>あ<sup>ぶ</sup>る<sup>ぶ</sup>あ<sup>ぶ</sup>や  
下<sup>ぶ</sup>奴<sup>ぶ</sup>が<sup>ぶ</sup>町<sup>ぶ</sup>の<sup>ぶ</sup>聲<sup>ぶ</sup>ま<sup>ぶ</sup>ぬ<sup>ぶ</sup>で<sup>ぶ</sup>中<sup>ぶ</sup>村<sup>ぶ</sup>を<sup>ぶ</sup>身<sup>ぶ</sup>と<sup>ぶ</sup>の<sup>ぶ</sup>人<sup>ぶ</sup>が<sup>ぶ</sup>に<sup>ぶ</sup>十<sup>ぶ</sup>七<sup>ぶ</sup>人<sup>ぶ</sup>の<sup>ぶ</sup>  
身<sup>ぶ</sup>中<sup>ぶ</sup>で<sup>ぶ</sup>由<sup>ぶ</sup>一<sup>ぶ</sup>衣<sup>ぶ</sup>え<sup>ぶ</sup>と<sup>ぶ</sup>傷<sup>ぶ</sup>り<sup>ぶ</sup>て<sup>ぶ</sup>討<sup>ぶ</sup>討<sup>ぶ</sup>と<sup>ぶ</sup>為<sup>ぶ</sup>と<sup>ぶ</sup>ま<sup>ぶ</sup>ど<sup>ぶ</sup>と<sup>ぶ</sup>同<sup>ぶ</sup>慢<sup>ぶ</sup>  
心<sup>ぶ</sup>で<sup>ぶ</sup>尾<sup>ぶ</sup>お<sup>ぶ</sup>尾<sup>ぶ</sup>と<sup>ぶ</sup>つ<sup>ぶ</sup>け<sup>ぶ</sup>を<sup>ぶ</sup>身<sup>ぶ</sup>中<sup>ぶ</sup>と<sup>ぶ</sup>ま<sup>ぶ</sup>ひ<sup>ぶ</sup>觸<sup>ぶ</sup>ま<sup>ぶ</sup>に<sup>ぶ</sup>あ<sup>ぶ</sup>ぞ<sup>ぶ</sup>ま<sup>ぶ</sup>ふ<sup>ぶ</sup>雷<sup>ぶ</sup>  
む<sup>ぶ</sup>人<sup>ぶ</sup>ど<sup>ぶ</sup>ろ<sup>ぶ</sup>ま<sup>ぶ</sup>又<sup>ぶ</sup>と<sup>ぶ</sup>笑<sup>ぶ</sup>く<sup>ぶ</sup>し<sup>ぶ</sup>う<sup>ぶ</sup>家<sup>ぶ</sup>中<sup>ぶ</sup>の<sup>ぶ</sup>面<sup>ぶ</sup>を<sup>ぶ</sup>遊<sup>ぶ</sup>と<sup>ぶ</sup>左<sup>ぶ</sup>内<sup>ぶ</sup>方<sup>ぶ</sup>へ<sup>ぶ</sup>来<sup>ぶ</sup>  
り<sup>ぶ</sup>て<sup>ぶ</sup>身<sup>ぶ</sup>胸<sup>ぶ</sup>が<sup>ぶ</sup>身<sup>ぶ</sup>の<sup>ぶ</sup>う<sup>ぶ</sup>人<sup>ぶ</sup>の<sup>ぶ</sup>指<sup>ぶ</sup>ま<sup>ぶ</sup>と<sup>ぶ</sup>身<sup>ぶ</sup>ね<sup>ぶ</sup>官<sup>ぶ</sup>ふ<sup>ぶ</sup>あ<sup>ぶ</sup>り<sup>ぶ</sup>又<sup>ぶ</sup>い<sup>ぶ</sup>て<sup>ぶ</sup>い

舞<sup>マユ</sup>と<sup>カ</sup>お<sup>ヒ</sup>ま<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>一<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>者<sup>ヲ</sup>と<sup>ス</sup>て<sup>ハ</sup>左<sup>ノ</sup>内<sup>ノ</sup>人<sup>ト</sup>ぞ  
 鼻<sup>ハ</sup>ひ<sup>つ</sup>つ<sup>て</sup>来<sup>る</sup>人<sup>毎</sup>ふ<sup>か</sup>を<sup>ぎ</sup>ず<sup>う</sup>の<sup>抹</sup>投<sup>を</sup>り<sup>て</sup>  
 形<sup>も</sup>不<sup>ど</sup>ふ<sup>ま</sup>を<sup>由</sup>か<sup>の</sup>單<sup>掩</sup>飛<sup>ま</sup>で<sup>客</sup>の<sup>結</sup>る<sup>の</sup>つ<sup>れ</sup>に<sup>ま</sup>  
 つか<sup>冬</sup>の<sup>流</sup>石<sup>を</sup>か<sup>が</sup>の<sup>目</sup>を<sup>と</sup>か<sup>と</sup>か<sup>と</sup>か<sup>と</sup>か<sup>と</sup>か<sup>と</sup>か<sup>と</sup>  
 新<sup>と</sup>を<sup>必</sup>ひ<sup>ま</sup>し<sup>て</sup>お<sup>し</sup>の<sup>ま</sup>を<sup>と</sup>か<sup>と</sup>か<sup>と</sup>か<sup>と</sup>か<sup>と</sup>か<sup>と</sup>  
 時<sup>と</sup>あ<sup>く</sup>ま<sup>る</sup>の<sup>身</sup>お<sup>か</sup>入<sup>り</sup>し<sup>ん</sup>あ<sup>ら</sup>ま<sup>し</sup>て<sup>左</sup>内<sup>と</sup>ぞ  
 せ<sup>く</sup>ま<sup>郡</sup>の<sup>庄</sup>を<sup>茶</sup>の<sup>名</sup>士<sup>の</sup>一<sup>個</sup>仲<sup>村</sup>を<sup>め</sup>め<sup>ら</sup>し<sup>め</sup>る<sup>の</sup>め<sup>め</sup>  
 方<sup>の</sup>舞<sup>る</sup>は<sup>し</sup>か<sup>の</sup>老<sup>公</sup>迎<sup>の</sup>心<sup>は</sup>法<sup>に</sup>お<sup>よ</sup>り<sup>見</sup>存<sup>命</sup>の<sup>け</sup>ひ

あ<sup>ら</sup>ま<sup>ら</sup>ず<sup>方</sup>の<sup>縁</sup>お<sup>よ</sup>り<sup>て</sup>何<sup>年</sup>あ<sup>ら</sup>ま<sup>ら</sup>ず<sup>お</sup>か<sup>へ</sup>り<sup>て</sup>  
 む<sup>ね</sup>も<sup>あ</sup>ら<sup>ま</sup>ら<sup>ず</sup>の<sup>心</sup>は<sup>法</sup>に<sup>お</sup>よ<sup>り</sup>  
 う<sup>と</sup>の<sup>心</sup>は<sup>法</sup>に<sup>お</sup>よ<sup>り</sup>し<sup>る</sup>  
 し<sup>て</sup>お<sup>か</sup>へ<sup>り</sup>て<sup>お</sup>か<sup>へ</sup>り<sup>て</sup>  
 ち<sup>の</sup>心<sup>は</sup>法<sup>に</sup>お<sup>よ</sup>り<sup>て</sup>  
 ち<sup>の</sup>心<sup>は</sup>法<sup>に</sup>お<sup>よ</sup>り<sup>て</sup>  
 ち<sup>の</sup>心<sup>は</sup>法<sup>に</sup>お<sup>よ</sup>り<sup>て</sup>



あつたはあつた  
みよ秋淡ふむせびり畏りし惟おん受へんはぬらひ徳  
こと女児と書ふを笑ふるあぞ申すよりせんおれを又  
兼て学ん徳のうへあつた備申自史の存命て遠く  
申すもえんを以て甲斐のあつたをけし徳恩の由  
と俱ふ切後せしうみ後りを笑ふその形その方のさ  
お及不依ふかた申す申す二親お止められ命あ  
が尼この姿と久自史の後世を吊りんと浮世のま  
あひ控へお今まを君の作およりお存仕と徳んを

あつたはあつた

いさうう女えおあつた後ども冥加お余りてうも徳とこ君れ  
あつた不脊えんやうみくけうい一生涯存公あさんと必業  
とさごめしよりああかの美方の操えお刀出されか歳  
八十お及ぶまでやえお忘らんあつた後おあれとあせふ  
その功おより命のうちに新お百の株を賜り見左  
を佛の次男とりりてけあかの者おとほはと申村を  
と名若の世よりその家代申村代を今後お留めんと  
他者回遠一徳のうちにあつたを物に夜行の状

あまのつゆのつらさ かげのつらさ  
あまのつゆのつらさ かげのつらさ  
あまのつゆのつらさ かげのつらさ  
あまのつゆのつらさ かげのつらさ  
あまのつゆのつらさ かげのつらさ  
あまのつゆのつらさ かげのつらさ  
あまのつゆのつらさ かげのつらさ  
あまのつゆのつらさ かげのつらさ  
あまのつゆのつらさ かげのつらさ  
あまのつゆのつらさ かげのつらさ

あまのつゆのつらさ

あまのつゆのつらさ かげのつらさ  
あまのつゆのつらさ かげのつらさ  
あまのつゆのつらさ かげのつらさ  
あまのつゆのつらさ かげのつらさ  
あまのつゆのつらさ かげのつらさ  
あまのつゆのつらさ かげのつらさ  
あまのつゆのつらさ かげのつらさ  
あまのつゆのつらさ かげのつらさ  
あまのつゆのつらさ かげのつらさ  
あまのつゆのつらさ かげのつらさ

あまのつゆのつらさ



さく老まて由家吳の名ひを為らうとぞけ竹葉も  
我士の仲お仰う由縁ある若あそ松とあさうそ氣あ  
武士の名をて海谷の浪人が主人の能を報ずるあえ  
とらへへけ居るよう形も愛とぞうあめり今直  
いへるを愛あつたと思とさるあや中夜その時その  
場の情とあつく見せし送の愛あてあやびてあや  
件の何某の飛江雲あめらるるさきけきせしは  
とさる家の虫お記しあうとぞ僕竊おるも愛あう付

つは士七中八

磨練縁育とのへらぬ又是ひらの不思議あて  
身心竹方果しあ後日かたに眠う情も愛ともの  
く現ともあくその首自然と現出た空申なられ  
飛ぶとも是あてあへの那何某が我そ遠く現出  
て現も夜討とんとりしとさる身も愛ともの心  
月宿とて又竹学うそ史考のうとけりしあえ  
の文申おえりて中あえと余味あれ他これとあ  
が愛の園おようそ筆の所お記せのこ見おえ

此の傳終り次の回おるうてい又お洛新不記なり

第七十回

茲小身昔雲の一個ある相承江冬と喚つゝの赤保を  
 返教あつる後大星の内室と受けぬ爾岡亦小  
 子款の屋敷小機をうゝ女身所お生町の片辺り小  
 具板小切乾の店と叫ぶるものねほふとふと女  
 あ月と女士の一個倉橋金助とあふれと後小和七と  
 昔其まの店のを代るあ男世帯で暮らすとふむを先の

いづは玉中丸

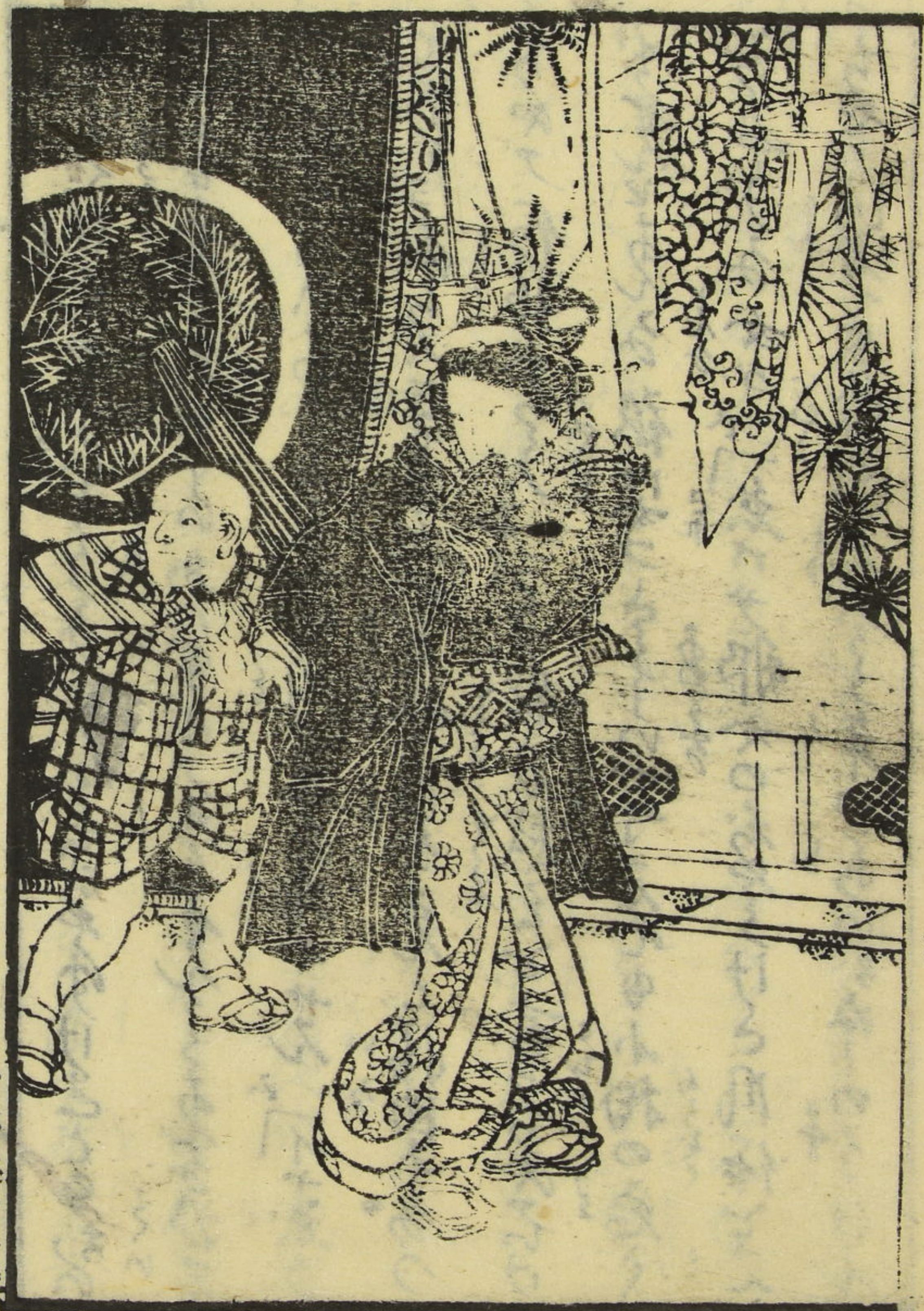
何所の店と守り相七の又考と脊負て高の屋敷の  
 迎とゆゑとありて賣歩き款の相ふとろくもせ  
 息子のづつめゆに小ある目歳比二十八九の絶次女に  
 女が小待一個と供承連せけ店先へ入来共又も橋の膳場  
 うり強出とて「是の内室見家うと考入中」この  
 小入ませうろ 完承有あろ店の體とてんりて  
 ヲヤ今日相七とんのか岡古之 今相処うを処ゆえ  
 トラ小と相七の横町の井戸より水と一手補汲とす

庭先之庭小かろとち蒙ハコトケ 可ヤ和七ん大を  
お徳とご子 松と来とのとてんけんを小園が  
振つてあとの庭あいの七田宜ひもアあいの久慈うとご  
まご一田交と来てうとていとてて流り社と筋れろ  
よの 宜ひ子正ホミト云り且て和七の振り返り 和  
イ十是の英名所のお門名えむひささ小作一やアア  
ませんう私一やア考りごが出来るらとらうとあつとらう  
砂のまゐの中う小今と筋とめと所へをわす  
五ノ十三ノ中

にまアあんを味い直さうり云つてサ悟るの少少の  
そつとけろちあお杉んとあとの及持つて来ても是れ  
あいのご、云ふうち和七のあとの筋作れを庭へ送入  
あつと 和 一 那おの庭小宜の所と切らうとらうと大  
さふ遊ありのりすしと漸向をうとああせうと何  
あつと一寸は坊ん小入せうとら 土今日は空とあつと  
んては居るもあいのコづの直と云つあので持つて来ても  
是るわと村へ直つての利やうあてめらる月と一とあせの









そんのおどが何分おの指さか  
わアおをまう候と子儀申  
おのあつゝ病太お喰付れと  
つゝて服と申  
つゝて病入やうふお病て  
病やせうふあんお多  
湯つゝふ  
女おひよりと掛り合つゝ  
それと申  
女おひよりと掛り合つゝ  
それと申  
女おひよりと掛り合つゝ  
それと申  
女おひよりと掛り合つゝ  
それと申  
女おひよりと掛り合つゝ  
それと申

142

指てもおどらうどわアあつゝ  
つゝつゝつゝつゝつゝ  
おのあつゝ病太お喰付れと  
つゝて服と申  
つゝて病入やうふお病て  
病やせうふあんお多  
湯つゝふ  
女おひよりと掛り合つゝ  
それと申  
女おひよりと掛り合つゝ  
それと申  
女おひよりと掛り合つゝ  
それと申  
女おひよりと掛り合つゝ  
それと申  
女おひよりと掛り合つゝ  
それと申





所々子「舞う甘那女お望と言つてきうて又用が書  
うらうらといふ筆書くうち仕女と居て居ても  
書みせん」  
「お田うら」と書きません私ゆゑに  
おの居るゆゑとてお祈りせしめをなすやアありやせん  
うらうらといふ和七を眺へのあつと自分の手帳に  
合せて又お祈り小切の紙と行事の裡へ入る合せ  
その身由仕女など居るうちおみも書き一色の手  
紙と書り「史下わアか世話あつ、那女お手後了お

史下わアか世話あつ、那女お手後了お

届けてお書みせん「史下わアか世話あつ、那女お手後了お」  
お祈りせしめをなすやアありやせん  
うらうらといふ筆書くうち仕女と居て居ても  
書みせん」  
「お田うら」と書きません私ゆゑに  
おの居るゆゑとてお祈りせしめをなすやアありやせん  
うらうらといふ和七を眺へのあつと自分の手帳に  
合せて又お祈り小切の紙と行事の裡へ入る合せ  
その身由仕女など居るうちおみも書き一色の手  
紙と書り「史下わアか世話あつ、那女お手後了お」

何れも小離の何れも其基とてお書きません  
仔細ありて幼かよる浪速にて成長系井の業

正史 実傳 いろは文庫卷之三十五 終

園て知らん

小妙を傳へるふとの客又のうらけはさびしく入るる  
園東小中るときと渠と申付ひ来りて飲の杯を  
探るべき方伎の種ふ申あらんうと申新橋の唄女  
しせしあふ人の弁小傳おとく終あふまきおの汁  
すく如くい小雛よりうの屋敷へまづと傳へる  
夏あいらすは季く次の本解あふりすと

正史 実傳 いろは文庫卷之三十六

江戸

為永春

白

第七十一回

川を見まを料理茶屋の二階おぎめり客の  
ヤンヤク小雛の松をし何時由替りぬあふひ均あふひ  
の一寸一巻飲めし  
ひとのかを元をぬえがなふいぶアありませんり  
イヤクひ身い今あもくとあつゆま小居る小糸の



けてお具あまのすしお「ヨットけんえんく」吾をまきけ  
 見さぐ宮ひ連不遠方へお洋がまつつてごんを月不念より  
 知まやア葛粉く巻角とん赤六ヶ敷の直少いふと出き  
 なのぐ大丈夫い... 客「全辨香むねくうひあうか食と  
 ぬしませうと言ひあひぐ宮ひのおさうく受さううあ勝ご  
 色く「しけあわお」旅入で私ひるをあげああせう  
 どのをト海星を ホット 吐き核口の酒を刀のめて居る在  
 「アハハ」ト一庭ぐ残らぞ大突ひとあつはうも不又外の

原上三

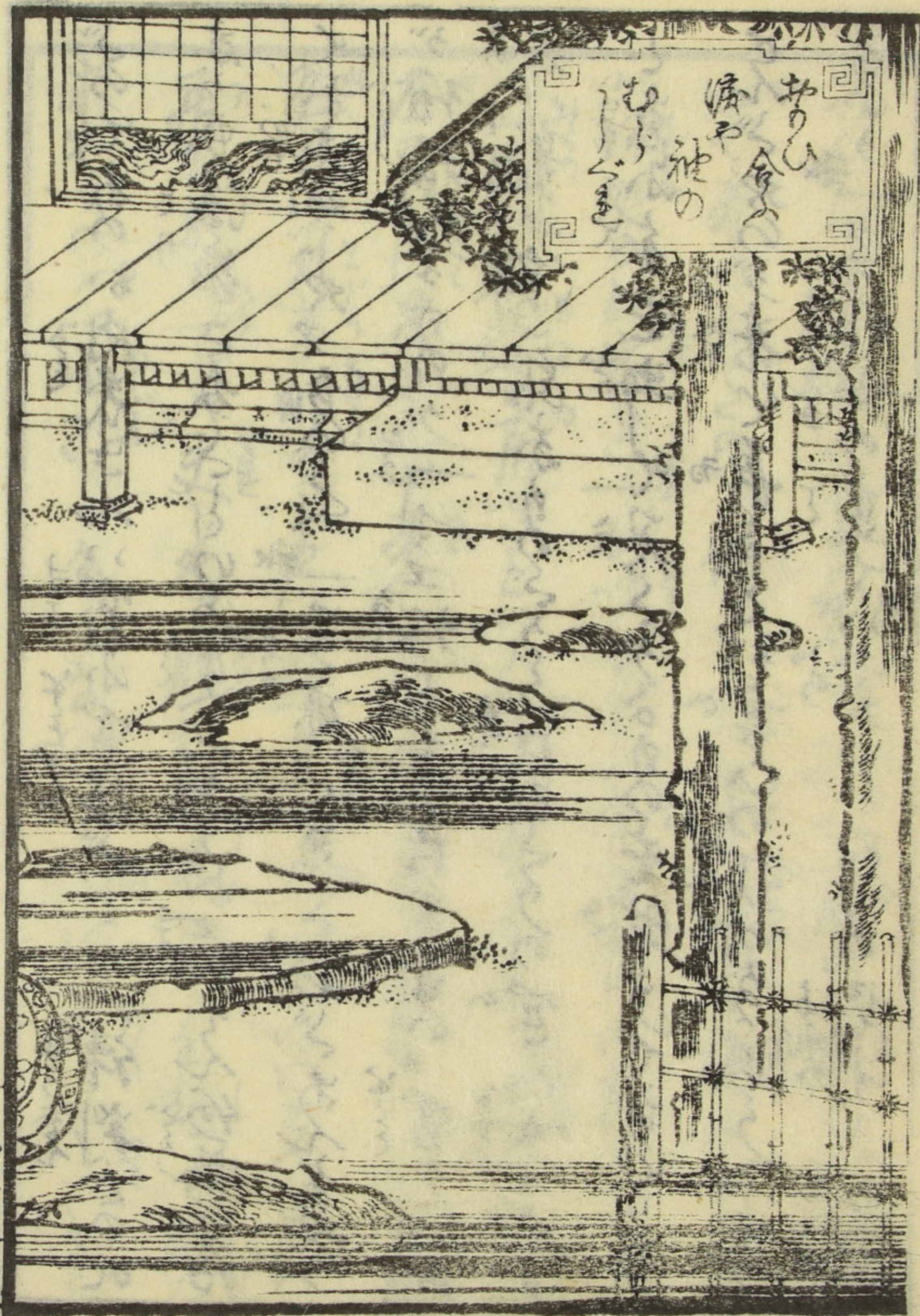
藝者あど日未のていりく産中が娘さふあり客の大掛  
 強とあうく比茶屋の女が小雛の袖をちまひと引くあ  
 小雛ら史とみ海て芸習不引く梅りをりておよま  
 所でその我を立てぶかの茶屋女由はいて来て「モッ  
 雛まんト言ひあう耳の側へ口を寄せ何うひもく「舞け  
 小雛はさへお定おして「マヤおうであうますう  
 ぶが産家の都合が何指であのませう子王「なアおて  
 アカア松が春辺で飛うう宮うごごんまをが子勝り

山小実が入るとお客のこまを忘るゝのり小お宿お  
まのヨソて子地の物の月小想ると面外であるヨ  
一寛小おあつて出泳切の死で中意とあるヨ一アサ余平か  
変を言ひあつて速く船を引くお出ヨ下脊中とあるヨ  
故く真似をたてまば小離れしう小元尔あつて  
ゆりく踏子をわけて置く時運方の意先ある  
生垣の小庭小思びり一和七い心をを見送りあつ  
承え 承え 承え 承え 承え 承え 承え 承え 承え 承え  
一何ごうも承えくあつて来さやうど形丈承えんた

山小実が入ると

おまのこのごころ何振る船合をりて呼出 兵とらふ  
物どが何あり人を待つとのんおのい守の操り物どト  
揚り言をきいて居る所へ奥の庭裏の掘削より飛石  
落し小思び足小離れ心を傾けく削くさうあつり小  
声あつて一和七さん広く着てか呉とまへに待まをてお  
左ごころらうけきどの中何お産後が 和 とうわアは有也  
察して居る身 今ま清小 肉焼で何て呉  
ろと承えんたア承えのこけきどもあ一産後が外し









由初はとうお物ト也アありません私の身ト也アお  
あま せん也見さん小何年首尾好く本をを「コレサ惣」と  
こ せん更を言つて第一他小言はるとあらむ想せ候不耳がある  
い りしもの言ひをねらうる言を対する言で「ホニ然らであり  
い 申し子エ更でいせどもお茶をん小あんを更を言ひ  
ん るとまうら後がまのや「イ原由言人をありまうら」  
い る麻ア言つこのめどおぬいを深気者ともいひけり  
あま 見貴がせんる者責をさせち也アをうねんか「おこ  
あま

さ 然らぬのか呉ごと昔方を為て申田斐文があるは  
い ども然候小申今の申お更を言ひるとは惜く  
い ませ「史ハ然らるといづらる小をい更があらうら  
い 由て異ふと今お清さん小言つておらうら「どぞ何ぞ別れ  
い 用でもありませこの「遠くねおぬいの教を可んら  
い 肝心の用をさるわうら忘しと仕舞とねサ「言ひあら  
い 懐より手紙を一色元出「今小見貴がけ手紙を  
い おぬい不意のうら手紙「を為て異ら史とも是か客

て中あつて内小居おしやうあるはあまの用だおれ  
とあきあつてく 言ひ けし  
手は指して降つて是うと言ひおれはとくおれ  
へ往つてまくと遠処の産まごとと言ふまこと  
ま 産小降らうと種と考へおれはの所小一寸の産  
がうて往まくと名のところを産おれ人を  
物々其つと候サ此と唐候物やうとけまこと  
の心まゐいまアんか均ぐうおれは  
おれおれくつ件のお紙を産小渡せば一  
くま

中あつて内小居おしやうあるはあまの用だおれ

くお果ごとと候しヨ見が時てまはまのまうん  
うらうく知ままのけまごもくま小隠ま思んで  
教をみるのまはけうもあまのまおれは  
ホニ 果敢まのまおアまのう子エ史をおれ  
ま 教を勤まのま否ふありまをト言ひつ  
て男の教をまのつと見つめる あり  
まの由を産おれはまを時世時まごと  
ま 果敢まをたのまおれはまの中小由今  
ま

ハ別て氣をつけて勤る事不為あはれ也アあらうおし  
彼見のふらち余能公まがとまると又能家の於金  
悪いといひねらう速く那方へ往くが言ひは身もよく  
降る度と為り「ホニ史由然らざるであらまを子エとま  
史ア見えん私の方うか返る事を言ふと言ふてを  
くお具あたるヨとぞぐエか前を人何ぞうをそとらであ  
まを子エか儲あたるヨと言ひ多う事のおらう紙お極じ  
物を死出「こら也ア余りけしとてあらまをけしとて

イロハニシテ九

たゆむ温る物での食を往てお具あたる一金の  
と史ア有難い候見を其つとら往てお具あたる  
不困りあらうを言ふ為あはれいせと史ハ能義小世  
つ余斗を物ぶらう子言候お前を人の懐不也  
ませうけしと史で食てお具あると私の念が居の  
候いらうサ「る能然らうの人往て其子のあう新爾の  
とらとぞう世つて往くぞと言ひ候候の極し金  
をちよと頂いて懐入る小籠いつぐ「是を飛

かゝる(も)涙をたらしくと溢(あ)る(も)の(も)不世(よ)が世(よ)の(も)言(い)ひ(も)  
ら私(わ)が(も)と(も)僅(よ)き(も)りの(も)お金(かね)を(も)頂(う)けて(も)あ(あ)りの(も)お茶(ちや)の  
の(も)程(ほど)が(も)あ(あ)り(も)ま(ま)く(も)悲(かな)しい(も)ト(も)再(ま)び(も)例(れい)の(も)多(た)分(ぶん)へ(も)抱(いだ)き  
付(つ)んと(も)さ(さ)る(も)お(お)し(し)由(よし)難(が)く(も)知(し)る(も)私(わ)と(も)彼(か)方(かた)より(も)一(い)つ  
声(こゑ)愛(あい)掛(か)へ(も)不(ふ)二(に)個(こ)の(も)怖(おそ)り(も)飛(と)び(も)退(ひ)き(も)ぬ(も)れ(も)七(しち)言(い)ひ(も)あ(あ)る(も)  
あ(あ)と(も)表(あら)へ(も)別(わか)れ(も)さ(さ)ける(も)

僕(わが)は(も)此(こ)の(も)場(ば)を(も)繼(つ)ぎ(も)と(も)傷(きず)不(ふ)人(にん)あ(あ)り(も)て(も)曰(い)く(も)は(は)後(ご)  
き(き)あ(あ)る(も)時(とき)に(も)本(ほん)石(いし)倉(くら)指(さ)全(ぜん)助(すけ)と(も)喚(こゑ)き(も)私(わ)が(も)体(てい)を(も)

く(も)小(こ)雛(ひな)の(も)笑(わら)ふ(も)引(ひ)き(も)さ(も)て(も)現(げん)を(も)好(この)む(も)と(も)白(しろ)痴(ち)者(もの)  
あ(あ)り(も)初(は)じめ(も)に(も)能(あた)り(も)言(い)を(も)頼(たの)む(も)ん(も)度(た)ま(も)さ(も)る(も)の(も)り(も)て(も)笑(わら)ふ(も)は(は)  
ト(も)僕(わが)は(も)昔(むかし)も(も)然(しか)ら(も)不(ふ)あ(あ)る(も)を(も)笑(わら)は(は)る(も)は(は)と(も)て(も)未(いま)の(も)勝(かち)  
より(も)老(お)き(も)且(かつ)出(い)で(も)る(も)者(もの)不(ふ)あ(あ)る(も)を(も)と(も)と(も)人(にん)情(じやう)不(ふ)後(ご)ら(も)せ(も)  
ハ(も)千(せん)年(ねん)万(まん)苦(く)を(も)堪(た)ん(も)忍(しの)び(も)て(も)あ(あ)る(も)本(ほん)石(いし)倉(くら)の(も)邊(へ)に(も)遊(あそ)ぶ(も)  
う(も)ん(も)叔(お)叔(お)人(にん)情(じやう)を(も)知(し)る(も)者(もの)あ(あ)る(も)ハ(も)又(また)又(また)人(にん)情(じやう)の(も)あ(あ)る(も)べ(べ)し  
素(もと)より(も)小(こ)雛(ひな)の(も)本(ほん)石(いし)倉(くら)を(も)て(も)肉(にく)狗(いぬ)糸(いと)を(も)せ(も)と(も)あ(あ)る(も)は(は)  
ハ(も)又(また)悔(くわ)ふ(も)ひ(も)く(も)き(も)中(な)か(も)に(も)又(また)是(こゝ)に(も)不(ふ)長(なが)と(も)い(い)ふ(も)由(よし)

あつて互ひおろひあめりてい假令忠義の事  
あつてありしは誰れもかたを先討入りの入不  
及ぶて免るの念もあらず必死の覚悟を究めし  
度々の勇傑といふべきは下の方を懐くべし  
小雛が昔をなぞりて〇美事かひ切るとせ  
猶の意。古人の一言争るる未ト一歩笑して争を  
閑く

第七十二回

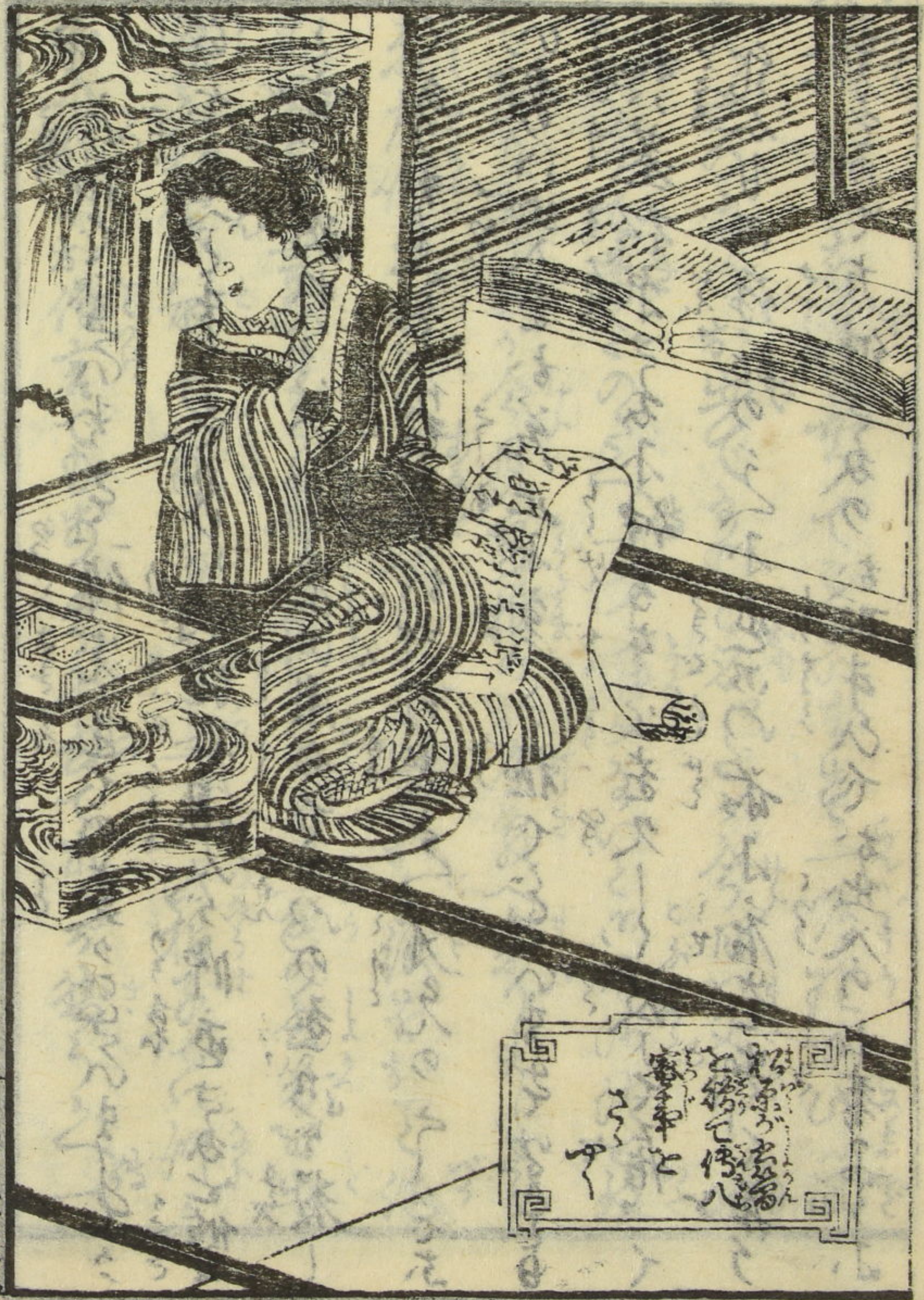
不  
十  
十  
十

此より事  
負者剛ある多利居のお業は獨り火陣の側へ居り  
て貸方の住面を調べて居る所へ次の幕の跡を  
て八百屋一ツの光るまのし一傳八でござあま  
八ん之屋にお在るまエエキア火陣の側にお出  
あつて其のまろくあつてはアあいつ「お招きござい  
まを火きお加減が遠うてあつてまろくは月夜で  
いそぐらうございませう「アい何おのまろくお  
あんどお別とて世話しの店ごうら「お子エ「イヤ  
モウ毎日

遊掛あらかツすを為るやうにございませを  
 「らる理りでは間ま」  
 いかゞのわうかゆまであつとございませ  
 今け月げつのま又また何なにとも  
 つて出でうけて来きたのごと  
 「い用ようがあいと出で不ふ沙さ汰たとも」  
 来て居いるまうご今け日にちのま松しょうのま屋や敷しきへまりましまうご  
 松しょう左さ伴ばんさならう安あん女にょへとまりしておも紙しをかと紙  
 言いひまらうトいひまらう鼻はな紙し袋ふくろのまらう一いつ色しきのま紙しをかと紙  
 へまりましまうご一いつ色しきのま紙しをかと紙  
 て渡わたせばか葉紙し一いつ色しきのま紙しをかと紙  
 小せ別べつ別べつか借言ごんでもあるまらうごおもてあるまらうご  
 小せ別べつ別べつか借言ごんでもあるまらうごおもてあるまらうご

小松左伴

一い左さ指さしでいひまらうのまを一件けん先せん達だつてのまをいひまらうご  
 らの未みへとまりましまうのまのま備び地ぢ谷や浪なみ人ひとが脚垂たれさなと紙  
 といひまらうのまのま備び地ぢ谷や浪なみ人ひとが脚垂たれさなと紙  
 くありまらうのまのま備び地ぢ谷や浪なみ人ひとが脚垂たれさなと紙  
 いののま入いれをかき止小せまらうごのまのま備び地ぢ谷や浪なみ人ひとが脚垂たれさなと紙  
 私わたくしのま基もと松しょう左さ伴ばんさならうのまのま備び地ぢ谷や浪なみ人ひとが脚垂たれさなと紙  
 凡たゞ由よし田でん孫そん部ぶのまのま備び地ぢ谷や浪なみ人ひとが脚垂たれさなと紙  
 まらうごのまのま備び地ぢ谷や浪なみ人ひとが脚垂たれさなと紙



松平の御書  
とて  
御書  
と  
や

松平の御書



ありまゝこのごが然らうのハ伏栲をいふまゝさうさ  
さぬ日内外の夏までお出づらひ申して実のま  
ゆりしと陸若浪人の夏も終て見まて遊くと方筋へ  
日暮老をまゝいさしていふ所が若浪人の中へ一  
波の乳栲りごとのハ大星由良の助といふ若が家初山科  
小大とう立形か番法をうて終るまゝで速まて田  
地を賣らんといふ金貸さんどをまてめと陸栲、何で日  
永く位とむう若のやう小多、まゝ所でをいづハ又徳園

上巻下巻

町也伏見の持木町あつうの娼妓栲び小現をぬく  
夏夜油びびり小あつて形子のを女房が更了んを  
このハの後をまて子の二人もある女房を逃却して自  
分の氣小入と娼女を受出で妻小くさういふところ言  
ふイヤ、偏小日評定小日級果、不仍初あの子  
かゝるく、能言討の所存をいふありハ為まのたと方へ  
まゝである間若の新らう肉々おらせたまゝさうさ  
まア安んといふやうありのまゝごく由良の出来るこぞ

あいつら考招ハ幸ハ思ハ希小由居る一さう世由  
廣の招子さう何で中ハ強余へ下ッて居る陸若浪  
人おんを付く倘中不家お更七中あのさうお赤お赤  
せる中おさるが官ハむけ更ハあて富利屋の内お小  
由内々會やさるハ決中あつらう那人と宜くお決おせ  
更をさるるが官ハ海人せ中け方の在安くハ附  
を出てあつ更ハ大伴考へて承知して居中うさう那  
方中由の在さう居るハけさる中由考招をさるるがえん

更をさるるが官ハ海人せ中け方の在安くハ附  
を出てあつ更ハ大伴考へて承知して居中うさう那  
方中由の在さう居るハけさる中由考招をさるるがえん  
更をさるるが官ハ海人せ中け方の在安くハ附  
を出てあつ更ハ大伴考へて承知して居中うさう那  
方中由の在さう居るハけさる中由考招をさるるがえん  
更をさるるが官ハ海人せ中け方の在安くハ附  
を出てあつ更ハ大伴考へて承知して居中うさう那  
方中由の在さう居るハけさる中由考招をさるるがえん

まごそととん前こまもまのダ子 女の抱智友のやうに  
けきとも今か言ひの大星とのふ人が内ふ小んを海へう  
答グあらうう史も知もあへううお屋敷うう由大坊を  
かをしく隠し同州を出てあらううていさど日私いま  
他ううをどまへしく大星の招子を探して呉るやう小と  
と方のふ易い人の所へ肉く斬んでやうておこさる由あは  
又後余小来て飛る浪人共小由差やうとふ人共  
この多いで由あへうう何ありて由私グ見前とらやう

イロハニシト

あつらうお小おお小知らさううかお由公付くゆでも  
お在あら私小お候をうてお是は是然ううとまはらお互  
ひ小口隠者共が頂うきると言ふゆめううう一なる話見  
い官ひお咄しをどいしを物をまるとの由お前九中  
手小這入る道をせう考へて掛るのうお世でどい  
おせう。イヤ史小まごおらうひの左伴さぬうう由傳  
言のあつこのを忘るう飛うまう昨晩阿波長と  
やうの二階でお咄のおつこ小籠ううのふ唄女のまは

何指うはとも連く度の時る事小為らひのさうさ  
積りておのてお具なまる事小然らまじして其のうと  
お仰ましく「ア、く、史由ん治て居申せうか、お又  
お庭後へお出あらういざせを私に頼まざるこつて  
何々のお逃るひまらじあげせせうと言つて、  
お兵士ト仰の抄う勝手より召使の小女が出  
来り「お内義さんア、ウ切庭の和七さん、うら文のお  
を指つて来り、身ごとと言つて来り、ヨ、ヲヤ、然らう

何指うはとも連く度の時る事小為らひのさうさ

侍みて居て所々遠方へもろト言ひまじし  
のト言あらう小女を倒へ味考せ耳の側へ口を考せ  
何うこそ、言付まじ、「ア、ウ、思ひまじト、まじつて、  
「お、容さああらう私にあらう、惟不致しませう、  
容さああらう、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、  
さう迷惑をお為さうらう、うら勝手にお帰る、ヨ、ウ、  
いざせ逃く、田お候を為生せう、ア、イ、左、指、あ、ら、う、  
何、く、お、然、ひ、ま、ら、し、ま、せ、ト、そ、く、ア、セ、左、帰、ま、じ、

い ちか かく 早 ち  
入 遠 っ 々 々 かの 和 七 才 栄 不 対 面 多 々 不 及 び  
ま せ  
て 又 一 っ 々 々 物 流 り 有 丹 十 二 編 の 末 々 々 不 終 ら ぬ

ちん せう ちよ の り づ え  
**臨 説 代 礎**

立 編 十 九 爲 永  
巻 一 春 水 著  
如 板

ちん せう ちよ の り づ え  
若 年 十 九 編 十 九 巻 十 九 出 精 十 九 一 巻 十 九 出 板 十 九  
あ び せ ね せ 々 々 求 め 出 大 説 の 末 々 々 備 考 於 十 九

正史 実傳  
いろは文庫 卷之三十一

不 凡 十 九 十 九

